

大学の英語必修科目における授業満足度および 学習意欲に影響する要因分析

竹蓋 順子・森川 セーラ・与那覇 信恵
千葉大学大学院国際学術研究院

Analysis of Factors Affecting College Student Satisfaction and Motivation in English Education

TAKEFUTA Junko, MORIKAWA Sarah, YONAHA Nobue

Abstract

This study aimed to analyze factors influencing student satisfaction and motivation in compulsory English courses at a Japanese university and to provide insights for educational improvement. A survey was conducted in six English courses during the spring semester of 2024, with responses collected from 3,778 students (response rate: 58.3%). Multiple regression analysis revealed that teaching methods had the strongest impact on student satisfaction across all courses. Other critical factors included satisfaction with teacher feedback and the perceived improvement in English skills, particularly in Discussion and Writing courses. Additionally, text mining of students' open-ended survey responses identified "homework" as a key factor affecting motivation, both positively and negatively. Writing courses, which required the most time for homework, demonstrated that students appreciated assignments when instructions were clear, and deadlines were appropriate. These students reported increased writing skills and personal growth, viewing the workload positively. The findings suggest that clear communication and proper support from teachers are essential for making homework an effective part of learning rather than a mere burden.

Keywords

college English education, student satisfaction, learning motivation, curriculum improvement, feedback quality

1. はじめに

デジタル技術の進展やグローバルな課題の多様化に伴い、大学教育にはこれまで以上に柔軟で、高度な質保証が求められている。2010年代以降、大学教育の質の維持と向上に向けた取り組みとして、中央教育審議会が学士課程教育の成果を基準とした評価方法を提唱するなど、大学卒業時に求められる学習成果を明確にすることが重要視されている。これに加え、社会のニーズに即応しうるスキルの習得と、急速に変化する知識基盤社会への適応力も求められている。そのため、大学は、卒業するときまでに身につけるべき能力を重視し、教育課程においても柔軟かつ実践的な学びの機会を提供する必要がある（中央教育審議会, 2016）。

このような状況のなか、日本の大学における英語教育は、グローバル人材の育成を目的とした質保証の重要な柱として位置付けられている。中央教育審議会（2016）の答申では、学士課程教育における基準として外国語運用能力の育成が明確に示されており、特に英語を通じた情報発信力や、高度な異文化間コミュニケーション能力が求められている。また、文部科学省（2018）が策定した「高等教育のグランドデザイン」でも、英語教育は国際競争力を高めるための基盤と位置付けられ、英語での授業展開や成果基盤型学習の実施が推奨されている。

こうした政策的背景を受けて、多くの大学では、英語教育の達成目標が明確化され、英語でのプレゼンテーションやディスカッションを含む実践的科目の導入が加速した。これにより、英語によるコミュニケーション能力の向上だけでなく、学際的な課題に対応できる能力の育成が図られ、さらに2020年代に入り、文部科学省が推進する「大学教育再生加速プログラム」などの取り組みを通じて、英語教育の質保証の枠組みはより一層深化している。具体的には、英語による課題解決能力や実務応用力を重視したカリキュラムの整備、学修成果を可視化するための評価手法の改善が求められている（小林, 2023）。また、各大学では、独自の教育プログラム評価を実施し、授業内容と達成目標の整合性を確保するため、学習成果データの活用が進められており（鳥居他, 2021）、これらの取り組みを通じて、英語教育は「質保証」と「学習者の実践力向上」を両立させる方向へと進化している。

これらの動向を踏まえ、本学では2020年度、「グローバル人材育成 ENGINE」と呼ばれる取り組みが開始された。この取り組みは、三本の柱から成り、すべての学部生及び大学院生が単位修得を伴う留学を必須とする「全員留学」、時間や場所を選ばない高水準の学修環境を整備し提供する「スマート・ラーニング」、そしてリング・フランカである英語を高度なレベルで使いこなせるように育成する「English Communication」が掲げられた。このうち、三つ目の目的を実現させるために行われたのが英語教育のカリキュラム改訂であった。

2020年度から本学で実施されているカリキュラムにおいては、全学部の学生が英語の必修科目として8単位の取得を求められている。1年次生には「Interaction」「Presentation」

「Discussion」「Writing」「CALL」の科目が、2年次生には「Critical Thinking in English」「English for Specific Fields」「CALL2」の科目が提供されている (Morikawa, 2024)。いずれの科目も、教員による多少の裁量は認められているものの、シラバスは原則として統一されており、各科目で目標とする力を等しく養成できるように設計されている。

千葉大学英語教育開発センターでは、これらの科目の教育効果および学生の授業満足度を把握し、カリキュラムのさらなる改善を図るため、毎年7月と1月に各科目の履修者を対象とした授業評価のための質問紙調査を実施している。この質問紙は、「授業評価に関する質問項目が授業改善に直接的に反映される内容であることが望ましい」(齊田, 2012)との考え方のもと、2021年度に作成されたものである。これは、全学で実施されている授業評価アンケート(約10項目から成る標準的な質問項目)とは異なるものであり、各科目の特性に応じた質問項目を盛り込み、適宜更新しながら運用されている。

このようにして導入から5年目を迎えた現行の英語カリキュラムについて、我々はこれまでの知見を踏まえつつ、効果の検証を行うこととした。この検証は、英語教育開発センターが実施している質問紙調査の結果を精査し、カリキュラムの成果と課題を明らかにすることで、データに基づいた授業の質の向上を図ることを目的としている。

なお、英語の必修科目のうち、英語リスニング力と語彙力の育成を主眼とした科目であるCALLおよびCALL2については、これらが使用する質問紙が他の6科目とは異なることから、本研究の検証対象から除外した。そのため、対象とするのは、「Interaction」「Presentation」「Discussion」「Writing」「Critical Thinking in English」「English for Specific Fields」の6科目である。

2. 研究の目的

前述の通り、大学にはグローバル人材の育成が社会的要請として強く求められており、英語教育においては学習者の主体的な学びや動機づけを重視したアプローチが必要とされる。しかし、学生の授業満足度や学習意欲に影響を与える要因は多岐にわたり、それらを体系的に明らかにすることは容易ではない。これらの要因の関与や相互作用を明らかにすることは、教育の質保証と学生の満足度向上を両立させるために不可欠である。

本研究の目的は、大学の英語必修科目における授業満足度および学習意欲に影響を及ぼす要因を明らかにし、それに基づき教育改善のための具体的な示唆を提案することである。特に、授業方法、教材の質、教員からのフィードバック、授業で課される宿題のそれぞれが、授業に対する総合的な満足度や学習意欲にどのように影響するかを検討するため、本研究では以下のリサーチ・クエスチョン(RQ)を設定する。

RQ1：学生の授業に対する総合的な満足度には、どのような要因がどの程度影響を及ぼしているのか。

RQ2：学生の学習意欲に影響を与える主な要因は何か。

3. 研究の方法

3.1 対象者

本研究の対象者は、2024年度前期に開講された1年次生の英語必修科目「Interaction」「Presentation」「Discussion」「Writing」の履修者、ならびに2年次生の英語必修科目「Critical Thinking in English」「English for Specific Fields」の履修者、延べ6,476名である（以下、各科目をそれぞれI、P、D、W、CTE、ESFと略す）。対象者には本研究の調査目的を説明し、氏名やメールアドレスなどの個人情報収集せず、匿名性が確保されることを伝えた。さらに、自身の回答結果が本研究に使用されることに同意した者のみを対象として回答を集計し、分析した。その結果、本研究の対象者は延べ3,778名（回答率58.3%）であった。科目ごとの履修者数、回答数、回答率については表1に示す。

なお、科目ごとに履修者数に差があるのは、学部によって前期と後期に配置する科目が異なるためである（たとえばIとPは、前期でなく後期に配置している学部が多い）。

表1. 科目ごとの質問紙への回答率（2024年度前期）

履修年次	科目名	履修者数	回答数	回答率
1年次	Interaction (I)	919	661	71.9%
1年次	Presentation (P)	917	424	46.2%
1年次	Discussion (D)	1,255	727	57.9%
1年次	Writing (W)	1,254	709	56.5%
2年次	Critical Thinking in English (CTE)	902	476	52.8%
2年次	English for Specific Fields (ESF)	1,229	781	63.5%
	計	6,476	3,778	58.3%

3.2 データの収集方法

本研究では、データ収集のためGoogle Formsを用いて無記名の質問紙調査を実施した。実施の際には、調査対象となる英語必修科目の授業を担当する英語教員に対して、授業中に学生が質問紙に回答する時間を確保するよう依頼した。

本研究で使用した質問紙は、2021年度に本学の英語教員によって開発されて以来、前期および後期の授業終了時に継続して実施されている。調査実施時には、毎回、質問項目の見直しと改善を行っており、2024年度前期に実施された質問紙の質問項目は表2に示した16項目であった。回答形式としては二項選択法、7件法、自由記述のうち、各質問項目に適したものを採用している。調査は2024年7月中旬から下旬にかけて実施され、対象者が質問紙に回答するのに所要した時間は10分程度であった。

表2. 質問紙調査の質問項目と質問形式

1.	授業を受けて、私の英語力のレベルは向上した。*	7 件法
2.	授業を受ける前と比べて、英語を話す時に自信が持てるようになった。*	7 件法
3.	授業で教科書を使用しましたか。*	二項選択
3.1	授業の教科書のタイトルは何ですか。	自由記述
3.2	教科書に満足した。	7 件法
3.3	教科書のレベルは易しすぎた。	7 件法
3.4	教科書は興味深く面白かった。	7 件法
3.5	教科書に対する感想や意見を書いてください。	自由記述
4.	授業で教材を使用しましたか。*	自由記述
4.1	教材に満足した。	7 件法
4.2	教材のレベルは易しすぎた。	7 件法
4.3	教材は興味深く面白かった。	7 件法
4.4	教材に対する感想や意見を書いてください。	自由記述
5.	この授業で、どちらのシステムを使用しましたか (Moodle/Google Classroom)*	二項選択
6.	この授業で、先生はシステムを効果的に使った。*	7 件法
7.	この授業で、あなたが宿題を仕上げるのにかけた時間はどのくらいですか。*	自由記述
8.	時間に対する感想や意見を書いてください。(例) 授業の時間帯、宿題に要する時間など	自由記述
9.	先生による授業方法に満足した。*	7 件法
10.	先生からのフィードバックに満足した。*	7 件法
11.	先生による授業方法に対する感想や意見を具体的に書いてください。	自由記述
12.	この授業で、英語を学ぶ意欲を14週間維持することができた。*	7 件法
13.	この授業で、あなたの学習意欲を向上させたものについて、具体的に書いてください。	自由記述
14.	この授業で、あなたの学習意欲を低下させたものについて、具体的に書いてください。	自由記述
15.	総合的に見て、この授業に満足した。*	7 件法
16.	この授業に対する感想や意見を書いてください。	自由記述

注. *は回答必須項目を示す。

3.3 データの分析方法

前章で述べた通り、本研究では2つのリサーチ・クエスチョンを設定している。まず、一つ目のリサーチ・クエスチョンである「学生の授業に対する総合的な満足度には、どのような要素がどの程度影響を及ぼしているのか」を解明するため、質問紙における「授業満足度」を従属変数とし、その満足度に影響を与える可能性のある6つの要因（「英語力が向上したという実感」「自信の向上」「教科書や教材の興味深さ」「授業方法」「教員からのフィードバック」「宿題にかかった時間」）に関する回答を説明変数として、英語必修科目6科目それぞれについて重回帰分析を実施した。

二つ目のリサーチ・クエスチョンである「学生の学習意欲に影響を与える主な要因は何か」を解明するためには、質問紙の自由記述欄への回答をテキストマイニングツールであるKH Coder（樋口, 2020）を用いて分析した。具体的には、6科目すべてにおいて「学習意欲を向上させた要因」および「学習意欲を低下させた要因」に関する自由記述回答を形態素解析し、単語頻度分析により出現回数を算出した。これにより、学習意欲を向上または低下させる要因を定量的に抽出し、整理して考察した。

4. 結果と考察

4.1 学生の総合満足度に影響を与える要因の分析

まず、学生の授業に対する総合的な満足度には、どのような要素がどの程度の影響を及ぼしているのかを明らかにするため、質問紙調査の結果を用いて重回帰分析を行った。表3には分析で従属変数または説明変数として用いた質問項目と、それらに付けたラベルを、表4には7項目の質問に対する各科目の回答の平均値と標準偏差を示す。

(1) 授業の満足度に影響を与える要因の分析結果

各科目の授業満足度について、6つの質問項目（表3の1～6）に対する回答を説明変

表3. 質問紙の質問項目と、それらに付けたラベル

質問項目	ラベル
1. この授業を受講して英語力が向上したか	「英語力向上」
2. この授業を受講して自信がついたか	「自信向上」
3. 教科書・教材は興味深かったか	「教科書面白い」
4. 教員の授業方法に満足したか	「授業方法満足」
5. 教員からのフィードバックに満足したか	「フィードバック満足」
6. この授業の宿題にかかった時間（単位：分）	「宿題時間」
7. 総合的に見てこの授業に満足したか	「総合満足度」

表4. 7つの質問項目に対する各科目の回答の平均値と標準偏差

科目名	I	P	D	W	CTE	ESF
n	661	424	727	709	476	781
1. 英語力向上	5.1 (1.3)	5.5 (1.3)	5.3 (1.1)	5.2 (1.4)	4.9 (1.3)	5.1 (1.2)
2. 自信向上	5.1 (1.4)	5.2 (1.4)	5.2 (1.2)	4.8 (1.4)	4.8 (1.4)	4.9 (1.3)
3. 教科書面白い	4.7 (1.4)	4.5 (1.5)	4.9 (1.4)	4.4 (1.5)	4.8 (1.6)	5.1 (1.4)
4. 授業方法満足	5.6 (1.5)	5.6 (1.5)	5.8 (1.2)	5.2 (1.7)	5.6 (1.4)	5.7 (1.3)
5. フィードバック満足	5.5 (1.5)	5.6 (1.4)	5.7 (1.2)	5.4 (1.7)	5.6 (1.3)	5.7 (1.3)
6. 宿題時間(分)	65.3 (43.8)	98.2 (63.7)	72.1 (47.0)	113.3 (67.0)	84.3 (47.1)	71.3 (44.4)
7. 総合満足度	5.6 (1.5)	5.6 (1.5)	5.9 (1.1)	5.2 (1.6)	5.5 (1.4)	5.7 (1.3)

注. Mean (SD)。質問項目1～7は表3の「ラベル」と対応している。評価は7件法で実施し、7が「完全にあてはまる」、1が「まったくあてはまらない」を示す。「宿題時間」のみ、単位は「分」である。

数として重回帰分析を行った。各科目の分析結果を表5から表10に示す。

なお、「宿題時間」は、学生が宿題にかけた週当たりの平均時間を示すが、単位が「分」であるため他の5つの質問項目と質的に異なる。このことから、変回帰係数を標準化し、標準回帰係数を用いて授業満足度に対する影響を分析した。

以上6科目の分析結果について、まず決定係数 (R^2) を見る。決定係数は0から1の範囲内の値を取り、1に近いほど目的変数が説明変数で十分説明されていると言える。一般的な目安として、0.7以上であれば回帰式が目的変数を比較的良好に説明しており、0.5か

表5. Interaction科目に対する満足度に影響を与える要因

変数名	標準偏回帰係数	標準誤差	t	p
1. 英語力向上	0.131	0.036	4.315	.001 **
2. 自信向上	0.057	0.033	1.908	.057
3. 教科書面白い	0.089	0.022	4.296	.001 **
4. 授業方法満足	0.612	0.033	18.561	.001 **
5. フィードバック満足	0.118	0.031	3.795	.001 **
6. 宿題時間	-0.012	0.001	-0.677	.499

注. ** $p < .01$; $R^2 = .804$

表6. Presentation科目に対する満足度に影響を与える要因

変数名	標準偏回帰係数	標準誤差	<i>t</i>	<i>p</i>	
1. 英語力向上	0.099	0.043	2.715	.001	**
2. 自信向上	0.032	0.038	0.892	.373	
3. 教科書面白い	0.0599	0.0256	2.372	.018	
4. 授業方法満足	0.640	0.042	14.689	.001	**
5. フィードバック満足	0.147	0.044	3.507	.001	**
6. 宿題時間	-0.022	0.001	-1.005	.316	

注. ** $p < .01$; $R^2 = .810$

表7. Discussion科目に対する満足度に影響を与える要因

変数名	標準偏回帰係数	標準誤差	<i>t</i>	<i>p</i>	
1. 英語力向上	0.206	0.032	6.603	.001	**
2. 自信向上	0.094	0.028	3.134	.002	**
3. 教科書面白い	0.076	0.019	3.182	.002	**
4. 授業方法満足	0.503	0.032	15.194	.001	**
5. フィードバック満足	0.120	0.030	3.676	.001	**
6. 宿題時間	-0.008	0.001	-0.372	.710	

注. ** $p < .01$; $R^2 = .682$

表8. Writing科目に対する満足度に影響を与える要因

変数名	標準偏回帰係数	標準誤差	<i>t</i>	<i>p</i>	
1. 英語力向上	0.202	0.037	6.402	.001	**
2. 自信向上	0.086	0.032	3.001	.003	**
3. 教科書面白い	0.058	0.021	3.034	.003	**
4. 授業方法満足	0.470	0.032	14.024	.001	**
5. フィードバック満足	0.195	0.030	6.377	.001	**
6. 宿題時間	-0.001	0.000	-0.075	.940	

注. ** $p < .01$; $R^2 = .832$

表9. Critical Thinking in English科目に対する満足度に影響を与える要因

変数名	標準偏回帰係数	標準誤差	t	p	
1. 英語力向上	0.118	0.046	2.742	.006	**
2. 自信向上	0.199	0.0430	4.697	.001	**
3. 教科書面白い	0.060	0.023	2.241	.026	
4. 授業方法満足	0.486	0.041	12.105	.001	**
5. フィードバック満足	0.143	0.039	3.956	.001	**
6. 宿題時間	0.003	0.001	0.148	.883	

注. ** $p < .01$; $R^2 = .765$

表10. English for Specific Fields科目に対する満足度に影響を与える要因

変数名	標準偏回帰係数	標準誤差	t	p	
1. 英語力向上	0.099	0.037	2.948	.003	**
2. 自信向上	0.113	0.031	3.556	.001	**
3. 教科書面白い	0.103	0.022	4.418	.001	**
4. 授業方法満足	0.491	0.032	15.546	.001	**
5. フィードバック満足	0.185	0.030	6.297	.001	**
6. 宿題時間	-0.010	0.001	-0.474	.636	

注. ** $p < .01$; $R^2 = .691$

ら0.7の間の場合はそれなりに高いと評価される。I、P、D、W、CTE、ESFの決定係数はそれぞれ 0.804、0.810、0.682、0.832、0.765、0.691であるため（表5から表10の注を参照）、いずれも授業満足度が説明変数（6つの質問項目）によって一定程度説明されていると判断した。

続いて、標準回帰係数を用いて各科目の授業満足度に対する影響を分析した。表11には、授業満足度に影響を与えているものについて、影響が大きい順に左から示す。

（2）授業の満足度に影響を与える要因に関する考察

全6科目の分析結果を総合的に考察すると、授業の総合満足度に対して最も強い影響を与える要因は、「授業方法に満足したか」であることが明らかになった。他の要因である「英語力の向上」、「自信の向上」、「教科書や教材の面白さ」、「教員からのフィードバック」、「宿題にかかった時間」と比較しても、「授業方法に満足したか」が特に重要であることが示された。

ここで言う「授業方法」とは、主に以下の内容を含むものとする。まず、授業の形態で

表11. 授業満足度に影響を与えている要素

科目名	授業満足度に影響を与えている要素（左から影響が大きい順）
Interaction	授業方法満足、英語力向上、フィードバック満足、教科書面白い
Presentation	授業方法満足、フィードバック満足、英語力向上
Discussion	授業方法満足、英語力向上、フィードバック満足、自信向上、教科書面白い
Writing	授業方法満足、英語力向上、フィードバック満足、自信向上、教科書面白い
CTE	授業方法満足、自信向上、フィードバック満足、英語力向上
ESF	授業方法満足、フィードバック満足、自信向上、教科書面白い

ある。これは、講義形式で進行する授業であるか、またはグループワークやディスカッションを取り入れたアクティブラーニング形式であるか、といった授業の形態を指す。二つ目に、授業の構成や計画性である。これは、授業がどのような順序で進められているか、またシラバスに示された目標や学習計画と一致しているか、といった点を含む。三つ目に、教員の教え方である。具体的には、教員の説明が分かりやすいか、あるいは学生の理解度に応じて柔軟に対応しているかどうか、などを含む。

前述の通り、現行のカリキュラムが開始されて以降、全科目において、原則として統一されたシラバスに基づいて授業が実施されている。これは、学生の学習体験における公平性と一貫性を確保するためである。また、各授業では、高度なスキルの習得を目的として、効果的なアクティブラーニングを積極的に取り入れた授業形式が採用されている。このような取り組みが、結果として高い英語力の養成に寄与していると推測される。

一方、教員の指導技術には個人差が存在する可能性を否定することはできない。しかしながら、現行カリキュラムが導入されて以降、本学の普遍教育英語科目においては、英語教員の採用条件としてTESOL¹やCELTA²、DELTA³などの資格の保有を必須とし、高度な英語運用能力を備え、英語で授業を行う能力を有すること、さらに日本の大学英語教育における豊富な実績を求めている。そのため、本学の多くの英語科目は、卓越した指導技術を有する教員によって担当されていると言える。

これらのことを踏まえると、多くの学生は、シラバスに基づく整理された授業運営や、授業中の明確な指示によって安心感を持って、積極的に学習に取り組むことができていると考えられ、このことが、学習成果や充実感の向上に寄与し、最終的には授業全体への満足度を高める結果につながっていると推察される。

また、すべての科目において、「教員からのフィードバックに満足したか」も、授業の総合満足度に大きな影響を与える要因であることが明らかとなった。Hattie and Timperley

(2007)によれば、教員からのフィードバックは学生の学習に最も大きな影響を与える要素の一つであり、その種類やタイミングが学習効果に大きな差を生むとされており、本調査の結果と一致している。2019年度以前の英語教育カリキュラムでは40名を超えるクラスが多数存在したが、2020年度のカリキュラム改訂により1クラスあたり25名程度にまで縮小された。これにより、教員がよりきめ細やかなフィードバックを提供することが可能になったことがMorikawa (in press) による担当教員に対するインタビュー調査によって明らかになっている。ただし、現在でも一部の科目では諸事情によりクラスサイズが30名を超えてしまう場合もあり、十分なフィードバックを行うことが困難との意見も挙がっている。このような課題への対策としては、たとえば、Fluckiger et al. (2010) が提案する学生自身のフィードバックスキルの育成が有効と考える。これは、学生が互いに形成的フィードバックを効果的に提供できる環境を整えることで、教育および学習プロセスの質を向上させるというもので、このアプローチは、特にクラスサイズが大きい場合において、実践的で有効な解決策となる可能性がある。

さらに、「英語力が向上したと感じているか」も授業の総合満足度に一定の影響を及ぼしており、特にDiscussion科目とWriting科目において、その傾向が顕著であった。これは、とりわけDiscussionやWritingが、自らの意見を英語で話したり書いたりする力を育成する活動を通して、学習の達成感や成長を実感しやすい科目であることに起因すると考えられる。たとえば、Writing科目では、学生は作文を教員に提出する前にGrammarlyと呼ばれる英文校正ツールを使用することが求められている。Grammarlyは、英語の誤りを指摘し、適切な表現を提案するだけでなく、剽窃の防止機能等も備えている。また、文法の正確性や表現の適切さ、設定された分野における文章の読みやすさなどが点数でも評価される。担当教員からのフィードバックに加え、こうした客観的な評価を得られるツールの存在もあり、学生は自身のライティング力の向上を実感しやすくなっており、それが授業の満足度にも直接影響したのではないかと推測される。

次に、Discussion科目は、そのシラバスに記載されている通り、以下の目標を掲げている。
 ①身近な話題について簡単な英語を用いて自分の意見を口頭で表現できるようになること、
 ②自分の意見を根拠や情報をもとに正当化できるようになること、
 ③話す順番を譲る、丁寧に質問する、他の学生を議論に引き込むといった方法を活用し、ディスカッションを円滑に進行できるようになること、
 ④他の学生の意見を理解し、わからない点について尋ねられるようになること、である。これらの目標は、英語でディスカッションを行う機会が限られ、英語での発話に対して苦手意識を持つ学生や、自分の意見を英語で即座に組み立て口頭で伝える技術が未熟な学生にとっては、達成が困難である場合も考えられる。しかし、本学のDiscussion科目の授業では、それらの技術が段階的に習得できるように構成されており、その結果として身についた技術は、他者とのディスカッションを通じ、自分の発言が相手にどのように伝わるかを直接体感できる。このような即時的なフィードバックを得られることから、学生は自己の成長を実感しやすいのではないかと推測される。そ

して、Discussion科目でこうした高い目標が設定されている分、それを達成できたときの喜びは大きく、その達成感が授業への高い満足度に繋がっている可能性があると考える。

4.2 学生の学習意欲に影響を与える要因

次に、二つ目のリサーチ・クエスチョン（学生の学習意欲に影響を与える主な要因は何か）を明らかにするため、テキストマイニングツールであるKH Coderを用い、質問紙中の「この授業で、あなたの学習意欲を向上させた要因について、具体的に記述してください」という質問項目に対する自由記述回答を形態素解析し、単語頻度分析によって出現回数を算出した。表12に、出現回数が上位5位に入る語を科目ごとに示した。続いて、「この授業で、あなたの学習意欲を低下させた要因について、具体的に記述してください」という質問項目に対する自由記述の回答について同様に分析した結果を表13に示した。

表12および表13を確認すると、すべての科目において「宿題」という語が上位5語に含まれているだけでなく、学習意欲を低下させる要因として、いずれの科目においても最も頻繁に使用されていることが明らかとなった。この結果を踏まえ、学習者の学習意欲を向上または低下させる要因として、いずれの科目にも頻出する「宿題」に着目して分析を行った。

まず、各科目において、学生が宿題に費やした時間の長さを確認し、その結果について、平均時間が長い順に表14にまとめた。宿題に費やされた時間がもっとも短いInteraction科目（平均65.3分/週）に対して、Writing科目にはその2倍近い時間（平均113.3分/週）が費やされていることがわかる。

また、科目間の比較がしやすいよう、調査結果を視覚的に示したものが図1である。Writing科目では、宿題に費やされた時間は週当たり「1～2時間」と回答した学生が42.5%ともっとも多く、次いで「2～3時間」の25.2%が続く。また「4時間以上」と回答した学生も3%おり、他の5科目と比較して、宿題に費やした時間が長い学生が多いこと

表12. 学習者の学習意欲を向上させたもの（上位5語）

	I		P		D		W		CTE		ESF	
No	語	回数	語	回数	語	回数	語	回数	語	回数	語	回数
1	宿題	56	presentation	98	discussion	97	宿題	84	宿題	41	宿題	49
2	会話	49	先生	24	先生	49	先生	60	先生	31	授業	40
3	先生	45	発表	23	宿題	45	書く	52	授業	18	先生	32
4	授業	36	授業	17	話す	44	essay	50	discussion	17	内容	29
5	EH*	27	宿題	14	授業	39	feedback	37	group	16	presentation	26

注. EHは千葉大学のself-access centreであるEnglish Houseの略称。

表13. 学習者の学習意欲を低下させたもの（上位5語）

	I		P		D		W		CTE		ESF	
No	語	回数	語	回数	語	回数	語	回数	語	回数	語	回数
1	宿題	56	宿題	43	宿題	61	宿題	113	宿題	30	宿題	46
2	時間	16	presentation	25	discussion	19	多い	35	難しい	7	難しい	15
3	意欲	11	発表	14	英語	17	英語	21	時間	6	英語	14
4	英語	11	多い	10	難しい	15	先生	18	多い	6	時間	13
5	難しい	10	時間	9	自分	12	書く	14	presentation	5	内容	13

表14. 各科目で宿題に費やされた時間（週あたり）

科目	平均（分）	1時間未満	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4時間以上
W	113.3	20.0%	42.5%	25.2%	9.3%	3.0%
P	98.2	25.5%	50.9%	16.0%	3.3%	4.2%
CTE	84.3	29.6%	54.6%	13.2%	1.9%	0.6%
ESF	71.3	43.4%	47.0%	8.3%	0.5%	0.8%
D	72.1	45.1%	43.1%	9.8%	1.7%	0.4%
I	65.3	51.6%	40.7%	6.4%	0.8%	0.6%

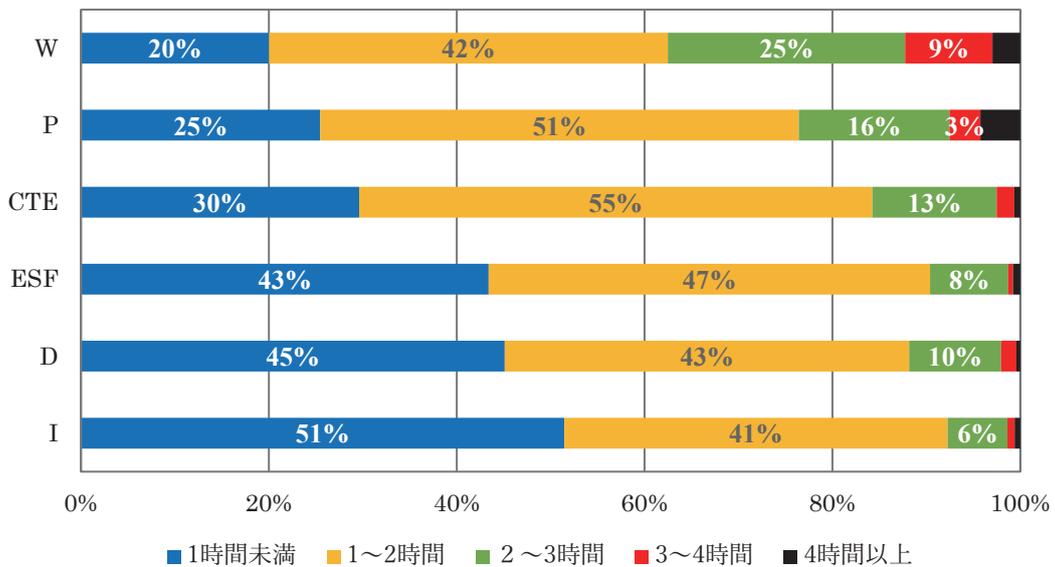


図1. 宿題に費やした時間（週あたり）の科目間の比較

が明らかになった。

次に、Writing科目の受講生で本質問紙調査に回答した709名のうち、「宿題量が多すぎる」と回答した59名の学生が宿題に費やしていた時間を調査した。その結果、「1～2時間」、「2～3時間」、「3～4時間」、「4時間以上」を宿題に費やした各群のうち、「宿題が多すぎる」と回答した学生の割合は、それぞれ7.3%、9.5%、21.2%、28.6%であった（表15）。これにより、宿題にかかる時間が長くなるほど、負担を感じる学生の割合が増加する傾向にあることがわかった。この結果は、直観的にも理解しやすいものと言える。

表15. Writing科目履修生における宿題時間と負担感の関係

宿題にかけた時間（週平均）	回答者数	負担を感じた人数	(%)
1時間未満	142	0	(0%)
1～2時間	301	22	(7.3%)
2～3時間	179	17	(9.5%)
3～4時間	66	14	(21.2%)
4時間以上	21	6	(28.6%)
合計	709	59	

一方で、宿題を負担に感じた理由として寄せられた意見には、単に「時間がかかる」という点以外の指摘も見られた。例えば、「ネイティブの先生の英語が難解で、宿題の意味を正しく理解できているのか不安だった」や、「月曜日に授業があるにもかかわらず、宿題の連絡が土日に突然送られてきて対応に困った」など、宿題の出し方や伝達方法に関する意見が挙げられた。特に後者については、教員の対応次第で直ちに改善が可能であると考えられる。

また、「3～4時間、宿題にかけた」と回答した学生は66名（9.3%）、「4時間以上」と回答した学生は21名（3.0%）であったが、そのうち「宿題の負担が重すぎる」と感じた学生はそれぞれ21.2%、28.6%であった。つまり、毎週、宿題に長時間を費やしたにもかかわらず、負担を感じなかった学生が70%以上存在したことになる。これらの学生の宿題に対する意見を見ると、「自分で文章を作り上げる宿題は時間がかかったが、それによって文章構成力が向上した」「Writingの能力を高めるためには、宿題に時間がかかるのは仕方がないことだと思う」「宿題は、より詳しい情報を調べるほど時間はかかったが、エッセイの書き方をしっかり学べた」「宿題に少し時間がかかったが、宿題の説明や身につけるべき力について丁寧に教えてもらい、とても充実していた」「宿題に時間がかかったが、その分英語に向き合う時間が増えてよかった」といった肯定的な意見が多く見られた。

以上の結果から、学生が宿題を負担に感じる理由として、宿題の内容や量に加え、課さ

れるタイミングや提出期限、英語教員の使用する英語の難解さ、さらに学生への指示の明確さといった要因が関与していることが判明した。また、長時間を要する宿題は、学習者にとって負担となる側面があるものの、一方で、十分な時間を費やすことで文章構成力の向上や深い学びを促進する、という積極的な効果も確認された。

これらの結果は、宿題が単なる負担として受け取られるか、学習の一環として有益なものと感じられるかが、教員による宿題の位置づけや説明の仕方、さらに学生自身の目的意識によって大きく異なることを示している。そのため、教員は宿題の意図や期待される学習効果を明確に伝えるだけでなく、学生が自己成長を実感できるよう支援することが重要と考える。

5. まとめ

本研究は、本学の英語必修科目における学生の授業満足度および学習意欲に影響を与える要因を分析し、教育改善のための示唆を得ることを目的として実施した。2024年度前期に英語必修科目6科目のいずれかを受講した延べ6,476名の学生を対象に質問紙調査を実施し、延べ3,778名から回答を得た（回答率58.3%）。

まず、学生の授業満足度に影響を与える要因を分析するため、各科目の授業満足度を従属変数とし、授業満足度に影響を与え得る6つの要因（「英語力が向上したという実感」「自信の向上」「教科書や教材の興味深さ」「授業方法」「教員からのフィードバック」「宿題にかかった時間」）に関する質問項目に対する回答を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、授業満足度に最も大きな影響を与える要因は、いずれの科目においても「授業方法」であることが明らかになった。この「授業方法」には、アクティブラーニングを取り入れた授業形態、教員の指導技術やシラバスに記載されている授業計画の適切性などが含まれる。また、「教員からのフィードバックへの満足度」や「英語力が向上したという実感」も重要な要素であり、特にDiscussion科目やWriting科目でその傾向が顕著であることが明らかになった。さらに、これらの結果を踏まえ、クラスサイズのさらなる縮小や学生間のフィードバックの積極的活用といった具体的な改善策を検討する必要性が示唆された。

学習意欲については、学生が質問紙の自由記述欄に記載した内容をテキストマイニングにより分析し、学習意欲を向上または低下させる要因を定量的に抽出し、整理した。その結果、どの科目においても「宿題」が良くも悪くも大きな影響を与える要因であることが明らかになった。また、6科目の中で最も宿題に費やす平均時間が長かったのはWriting科目であり、学生による自由記述を分析した結果、宿題に関する教員の英語による説明が明確であり、提出期限が適切に設定されている場合には、宿題に多くの時間を費やしても、ライティング力の向上や自己成長を実感し、それを肯定的に受け止める学生が一定数存在することが判明した。このことから、宿題を単なる負担ではなく学習の一環として効果的

に機能させるためには、教員による丁寧な説明や適切な支援が不可欠であることが示唆された。

一方で、本研究にはいくつかの限界が存在する。第一に、調査対象が本学の英語必修科目に限定されており、他大学への一般化が困難である点が挙げられる。第二に、質問紙調査を主なデータ収集手法として採用し、英語力の向上を客観的に測定する指標を導入できなかった点も課題である。これらの課題を踏まえ、今後の研究では他大学との比較研究を含む視点を導入するとともに、客観的データと主観的データを組み合わせることで、より包括的で信頼性の高い知見を得ることを目指したい。

最後に、大学英語教育に対する社会からの期待は、時代の変化とともに大きく移り変わってきている。かつては基礎的な英語力の習得が主な目標とされていたが、グローバル化が進む中で、実践的なコミュニケーション能力や批判的思考力、さらには異文化理解力の育成が重要視されるようになってきた。これに加え、AIツールの急速な普及も大学英語教育に新たな影響を与えている。翻訳アプリや生成AIの活用が一般化しつつある状況の中で、学生がこうしたツールを効果的に活用しながら、自ら考え、創造的に発信できる力を育むことがこれまで以上に求められている。

こうした多様化する期待に応えながら、質の高い授業設計を追求するとともに、学生一人ひとりが成長を実感できるような充実したサポート体制の構築に取り組みたい。これにより、大学英語教育における質の保証と学習者の成長支援の両立を図り、変化する時代に即した教育環境を提供していきたいと考えている。

謝辞

本研究の実施にあたり、授業評価アンケートにご協力いただいた学生の皆さん、ならびに授業を担当された先生方に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 中央教育審議会 (2016). 「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー) 及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー) の策定及び運用に関するガイドライン. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf
- Fluckiger, J., Vigil, Y.T.Y., Pasco, R., & Danielson, K. (2010). Formative feedback: Involving students as partners in assessment to enhance learning. *College teaching*, 58(4), 136-140.
- Hattie, J., & Timperley, H. (2007). The power of feedback. *Review of educational research*, 77(1), 81-112.
- 樋口耕一 (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して (第2版) KH Coderオフィシャルブック』ナカニシヤ出版.
- 小林正佳 (2023). 「〈論説〉日本の大学英語教育の現状について (上)」『横浜経営研究』43(2・3・4), 43-52.

- 文部科学省 (2018). 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申). https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm
- Morikawa, S. (2024). Development of a General English Education Curriculum at a Japanese University, *Journal of English Language Education and Research*, 1, 35-54.
- Morikawa, S. (2025). Assessing the Efficacy of English Language Curriculum Reforms: Teacher Insights, *Journal of English Language Education and Research*, 2. (in press)
- 斉田智里 (2012). 「授業満足度と成績に影響を及ぼす授業評価要因の検討: 大学英語教育プログラム改善の観点から」『全国英語教育学会紀要』 23, 389-403.
- 鳥居朋子・岡田有司・山田剛史・林透・高橋哲也・村上正行・大山牧子 (2021). 「学部における教育情報の活用およびIRの現状と課題: 全国調査と事例研究の分析を通して」『大学教育学会誌』 43(2), 89-93.

注

- 1 Teaching English to Speakers of Other Languagesの略。英語を母語としない人々に英語を教えるための資格。
- 2 Certificate in English Language Teaching to Adultsの略。ケンブリッジ大学英語検定機構が提供する資格で、英語を教えるための入門レベルの国際資格。
- 3 Diploma in English Language Teaching to Adultsの略。CELTAの上位資格。